



ICRC

ICRC ニュースレター

第9号
2010年 春号



© ICRC/A. Gutman

家族と再会を果たす元子ども兵士（コンゴ民主共和国南キヴ州）

読者の皆様へ

赤十字国際委員会 (ICRC) 駐日事務所を設立して2月3日で丸一年が経ちました。

「紛争の犠牲となっている人々に寄り添い、人間の尊厳と生活を守る」。ICRCのこの理念を掲げ、駐日事務所は一年間、国内外各方面からご指導ご鞭撻を賜りつつ、ICRCの活動の重要性を日本の方々を知っていただけるよう尽力してきました。期せずして、2010年8月制定のクラスター弾に関する条約において、東アジアで最初の批准国が日本であるということも単なる偶然ではないでしょう。人道分野において日本政府の関心そして貢献度が高まり、政策・財政両面から私たちICRCの活動を支援していただいている事実を大変嬉しく思います。

昨年に引き続き、今年もジュネーブ本部から事業局長のピエール・クレヘンビュールが訪日し、外務省をはじめ日本赤十字社、日本メディアの方々と共に多岐にわたる意見交換をすることができました。

その中で、私たちは日本人職員を採用する際に、必須条件であるフランス語を免除す

るという決断をしました。採用時のフランス語免除は、ICRCからすれば画期的な試みで、今のところ日本のみが適用対象となっています。外務省の福山副大臣にもその旨を直接お伝えし、ご支持いただきました。こうした流れを受けて、駐日事務所は2010年中に国際的に活躍できる優秀な日本人を積極的に採用する意向です。

最新のICRCニュースレターでは、世界中で展開されているICRCの活動の中から、ハイチとチリ、チャド、パレスチナ自治区ヨルダン川西岸の最新状況を報告しています。一月に大地震に見舞われたハイチでは、何千万ものハイチ人およびハイチ在住外国人がICRCのウェブサイトを利用して安否情報を入力、国内のみならず海外に暮らす親族も被災者の安否や消息を知ることが可能となっています。

また、「忘れられた危機」と称され、長引く情勢不安にあえぐチャドについても触れています。スーダン国境に近い同国東部では昨年11月、ICRC職員一人が武装グループに誘拐・拉致されました。事件発生から89日後の2月には無事解放されましたが、同国での活動は常に危険と隣りあわせの中行われています。

さらに、2010年の活動重点地域も紹介しています。ICRCの活動のほとんどは10~30年と長期にわたります。「活動拠点の維持」と「関係当局との信頼関係構築」は、将来の危機に迅速に対応するための必須条件です。そのことは、ガザやスリランカで実証されました。最悪の状況下でも苦しみにあえぐ人々の近くで支援を行うことができたのです。

最終ページは、アフガニスタン南部のカンダハールでICRCが支援する病院で半年間勤務した苦米地看護師の報告です。海外の紛争地で活躍する、貴重な日本人スタッフの体験談となっています。

二年目に突入した駐日事務所は、関係各位の多様なニーズに応えるため、小規模ながら組織を拡大し、事務所スペースとスタッフを増やしました。新年度もこれまで同様、皆様が変わらないご支援ご協力を賜りつつ、さらなる発展を目指して邁進していきたいと思っています。

長嶺義宣

赤十字国際委員会(ICRC)
駐日事務所所長

世界の活動現場から

ICRCは世界のおよそ60カ国に拠点を置き、80カ国以上で紛争や暴力の犠牲となっている人々を支援・保護しています。このコーナーでは、人道危機が著しい地域に焦点を当て、現地の最新情勢とICRCの活動を紹介します。

ヨルダン川西岸地区：パレスチナ人の苦難は続く

パレスチナ自治区ヨルダン川西岸に住む多くのパレスチナ人にとっては、日々の生活を営むことすら苦難の連続です。特に、分離壁や入植地の付近の「C地区」(ヨルダン川西岸地区総面積の半分以上が含まれる)は、完全にイスラエルの文民・軍事統制下に置かれていて、パレスチナ人は分離壁やチェックポイント、土の小山やフェンスなどの障害物を避けながら通常とは異なる迂回ルートを通ることを余儀なくされています。人々は隔離されているばかりでなく、隣の村に行くこともままならないのです。十分な医療サービスも受けられていません。

建築許可を得るのも一苦労。多くの家族が許可なしに建物を建てているため、いつ自宅を壊されるかわかりません。実際、イスラエル当局は2009年に20軒もの家を取り潰し、東エルサレムでも50軒が壊されました。電気や水道の使用を巡っても問題は頻発しています。パレスチナ人は雨水を貯めたり、水の取引をしったりして急場をしのいでいます。

ICRCは、イスラエルの占領統治や占領政策が人道にもたらす影響をつぶさに監視し、国際人道法、特に占領についての法律を後ろ盾にイスラエル当局に対して守秘

義務に則った形で抗議を行っています。占領者であるイスラエルは、人道法の下、いかなる時も一般市民を人道的に取り扱う義務を負います。軍事と関わりを持たない民間人の所有物に対する挑発や破壊など危害を加えることは一切やめなければなりません。法律は、占領者が自分たちの側の住民に占領地を移譲することも明確に禁じています。何より、ヨルダン川西岸地区の分離壁は人道法に反しています。司法当局者に適用できる国際基準と人道法の支配を促進するため、ICRCは政府当局や軍隊、市民社会において影響力を持つ人々との対話を継続しています。

ハイチ & チリ：家族の連絡回復・再会支援事業 (RFL)

大地震に見舞われたハイチとチリでは、震災で離れ離れになった家族の連絡回復や再会支援の事業 (RFL) を行っています。

ハイチでは、懸命な救出活動が行われる一方で、家族は別々の緊急避難所に連れて行かれたり、廃墟となった首都から地方に逃れてしまったりと、生き別れになるケースが多く見られます。子供たちの多くが両親や保護者を失い、近所や同じ自治体に住む人々の世話を受けています。被災者は、コミュニティセンターやICRCおよび赤十字社の登録所で名前を登録でき、ラジオ局の協力を得て行方不明者の名前を放送してもらったり、衛星電話で親族と話す機会が与えられたりします。

チリでは、最も深刻な被害を受けた

地域に加え、津波を恐れて海岸沿いの丘に逃れた人々が暮らす避難キャンプでもRFLを行っています。RFLチームは刑務所も複数訪れ、収容者に衛星電話を提供すると共に、管理当局の要請を受けてチリ赤十字社との連携のもと医薬品を調達しています。



震災後、ICRCの衛星電話で親族に安否を知らせる少年 (1月22日、ハイチ)

そのほか、ICRCは連絡を取りたい親戚の名前を登録するウェブサイトを提供しています。消息を知りたい人物の名前、もしくは名前の頭文字を入れて検索すれば、国内外を問わず調べることが可能です。

RFL専用ウェブサイト
「ICRC FamilyLinks」
⇒<http://www.familylinks.icrc.org>

チャド東部：慢性化する情勢不安とスタッフの安全管理

1960年にフランスから独立して以降、チャドでは頻発するクーデターや内戦に市民生活が脅かされています。昨今では、複数の武装グループが東部を拠点として政府軍と対立。大規模な戦闘には至らないものの、民族の違いや政治不信、天然資源の争奪や貧困問題なども相まって小規模な衝突が絶えません。また、隣国のスーダン政府とは、武装グループへの支援を巡って互いに糾弾し合うなど、緊張関係が続いています。

ICRCは1978年からチャドでの活動を開始

し、国内避難民への援助や収容所の訪問、緊急物資の提供、生計建て直しの支援、傷病者の治療支援や義肢の提供などを行っています。また、スーダンから逃れてきた大量の難民を対象にRFLにも取り組んでいます。

そんな中、チャド東部で昨年11月に誘拐されたICRC職員のローラン・モリスが、2月6日、89日ぶりに無事解放されました。農学者のモリスは事件当日、スーダン国境付近の町で収穫状況を調査していました。隣国スーダンでも昨年10月22日、水

供給のインフラ改善を図るため北部の集落に出かけたICRCジュナイナ事務所(西ダルフール)所長のゴーチエ・ルフェブレが武装グループに誘拐されましたが、3月18日、事件発生から147日後に無事解放されました。ルフェブレは、ICRCの粘り強い交渉とスーダン政府及び当局の尽力に感謝の意を述べました。

事件防止に向けてICRCは活動地の状況分析を定期的に行い、可能な限りの対策をとることでスタッフの安全確保に尽力します。

2010年の活動ハイライト

世界中で展開されるICRCの活動は、そのほとんどが各国政府からの資金援助で成り立っています。2010年のICRCの当初活動資金要請額は、9億8320万スイスフラン（約836億円）を計上しました。（1スイスフラン＝85円で計算）

ICRCは武器・兵器の被害を受けた人々、生命や生活が危険にさらされている市民や国内避難民、被拘束者を支援・保護し、行方不明者を追跡調査しています。その活動の原動力は、武力紛争などによって被害を受けている人々の状況を改善する、という使命感からきています。人々の安全・尊厳を守るという重要な目標のために、各国の赤十字社・赤新月社と共にICRCの職員12,000人余りが日々様々な状況に立ち向かっています。目標達成に向けた職員一人ひとりの決意は強靭です。

ICRCの重要な役割は、中立で公平、かつ独立した人道支援活動によって人々にもたらされる恩恵や国際人道法の妥当性を示すことです。ICRCの活動資金のほとんどは各国政府から拠出されていて、欧州連合（EU）の行政執行機関である欧州委員会を加えると、その割合は全体の92%以上に上ります（図1参照）。国ごとで見ると、日本も主要ドナーとして、アジアで唯一TOP20入りしています（図2参照）。

2010年に最大規模の活動が展開されるのはアフガニスタンです（図3参照）。これは、2009年のスーダンやイラク、そしてパキスタンでの活動成果により当地のプロジェクトが縮小傾向にあること、また、アフガニスタンにおける活動の重要性が増していることが理由として挙げられます。現在アフガニスタンでは、1500人以上のICRC職員がカブールを中心に国内の5つの地域で活動しています。武力の犠牲となっている人々を支援しながら、病院やリハビリセンターにおける援助、そして水設備や生活状況の改善などのプロジェクトも継続していきます。

地域別に活動資金を見ると、2009年と比較してアフリカ地域では10%減、アジア大洋州地域では24%増、ヨーロッパ・アメリカ地域では8%減、中東・北アフリカ地域では4%減となっています（図4参照）。アジア大洋州地域で高まりつつある人道的ニーズに応えるため、ICRCは状況改善に向けて今後も積極的に活動を行います。

ICRC駐日事務所ではインターンを募集しています。ご関心のある方は以下までお問い合わせ下さい。

Email: tok_tokyo@icrc.org
または電話: 03-6459-0750
総務担当・鈴木まで

図1 ICRCの資金源 (2009年)

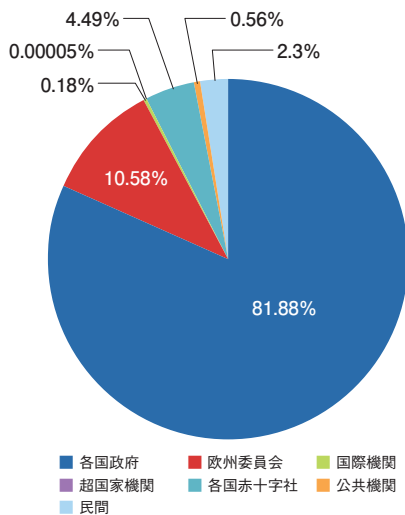


図3 活動規模上位10カ国

順位	2010年度	2010年度当初活動資金要請額 (億円)
1	アフガニスタン	73.1
2	イラク	72.4
3	スーダン	64.9
4	コンゴ民主共和国	56.4
5	イスラエル(パレスチナ自治区)	52.3
6	パキスタン	48.1
7	ソマリア	46.7
8	コロンビア	31.4
9	イエメン	20.3
10	チャド	18.8
	合計	484.4

図2 拠出額上位20カ国 (2009年)

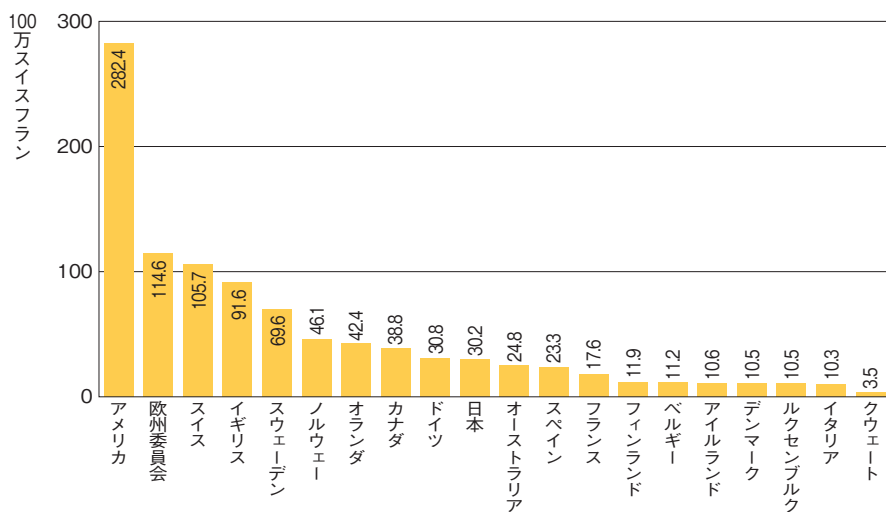
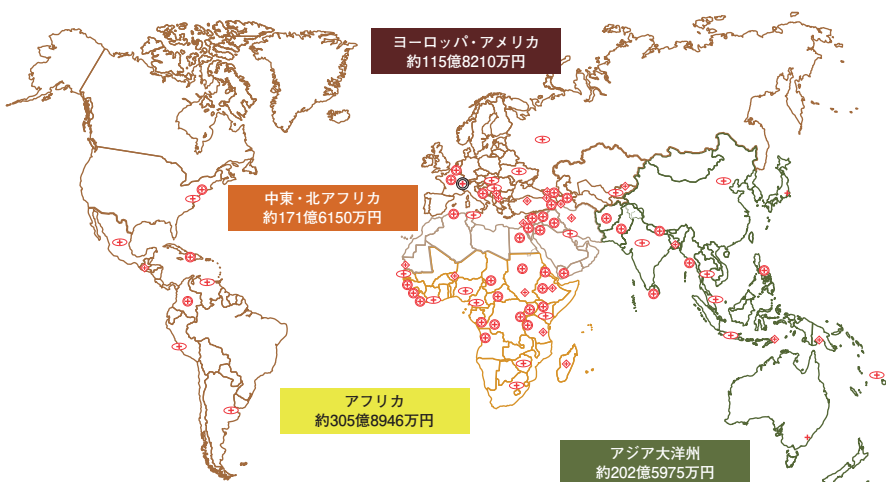


図4 地域別活動予算 (2010年)



国際赤十字ニュース

戦渦の拠点病院で直面した壁

～患者家族とのふれあいに癒された日々～

アフガニスタンの復興への道は長く厳しく、まだまだ不安定な状態が続いています。私は2009年8月から今年2月までの6ヶ月間、アフガニスタン南部カンダハールのミルワイズ地域病院で病棟看護師として活動しました。ICRCが支援する同病院の看護の質の向上と地元スタッフへのトレーニングが主な目的です。

1996年以来続くICRCによる紛争犠牲者支援。当初は外科への支援が中心でしたが、地域病院としての役割を担うべく現在は、産科・婦人科、小児科、内科と多岐にわたり多くのICRC要員が投入されています。ICRCの得意分野である戦傷外科はもちろんのこと、感染症、そして日本でも問題視されている生活習慣病への対応も必要であり、紛争地域における開発援助プロジェクトという特色は、これまでのICRCの運営管理する戦傷外科病院とは異なる難しさがありました。

患者の多くは遠くから何時間もかけて来院し、カンダハールを含め5県を管轄する拠点病院としての役割は大きいものでした。パシュトンが多いこの地域では特に男女の区別が厳しく、患者は男女別々の病棟に振り分けられます。私が主に担当

していた女性外科病棟は、男性病棟と比べて戦傷患者の数は少なく、その反面合併症を抱えた帝王切開や、冬という季節柄暖をとるための火や明り取りのケロチンランプの火、また通常の調理時の不注意によって火傷を負う患者の多さが印象に残りました。広範囲の火傷の場合、亡くなるケースも後を絶ちません。限られた資源(施設・設備・人材)の中での越えられない壁でした。

活動中感じるのは壁ばかりではありません。ミルワイズではいつも患者さんは多くの家族に囲まれていました。家族の情・絆の深さはアフガニスタンに特徴的です。その献身的な姿にはいつも心を打たれていました。長く入院している患者さんやその家族と過ごす時間は、厳しい環境に置かれた私にとって至福のひと時でした。通訳なしでは会話は通じませんが、親近感が沸き心が通じる瞬間もあります。家族と共にすがる思いで病院に到着した患



者さんが治療を受けて元気に退院していく姿を見るにつけ、私たちは自分たちの存在意義を確認したものでした。

様々な困難を抱えた人々が人間らしく健康に生きていくため、ミルワイズでの私達の活動、ICRCのサポートがその一助となり続けることを今後も期待します。

苦米地則子

日本赤十字社医療センター
看護係長

宝塚雪組公演

『ソルフェリーノの夜明け』 — アンリー・デュナンの生涯 —



© 宝塚歌劇団

"赤十字の父"で、世界初のノーベル平和賞受賞者、アンリー・デュナンの生涯を描いた宝塚ミュージカル・ロマン「ソルフェリーノの夜明け」が、宝塚大劇場(兵庫)に引き続き、東京宝塚劇場で3月26日に幕を開けます。

時は遡ること1859年。スイス人の実業家、アンリー・デュナンは、商用でたまたま通りかかったイタリア北部ロンバルディア地方で、「ソルフェリーノの戦い」に遭遇します。わずか一日で4万人もの死傷者を出し、小さな田舎町の教会は野戦病院と化しました。あまりの惨状に己の目を疑うデュナンに、更なる衝撃が走ります。負傷者が教会の入り口で敵/味方に選別され、敵軍は治療されずに野晒しの広場に放置されていたのです。デュナンは早速近隣の住民にボランティアを募り、全ての負傷者への公平な治療を目指します。しかし、周囲の風当たりは強く、理想と現実のはざ間で葛藤を繰り返すデュナンはやがて…。

情熱的で人間愛に満ちたアンリー・デュナン。その波乱に満ちた人生と、国籍、人種、宗教などにかかわらず、人の命や尊厳を守り、人々が平和に暮らしていくことの大切さを描いた「ソルフェリーノの夜明け」を是非ご覧下さい。

東京宝塚劇場公演

公演期間：3月26日(金)～4月25日(日)(月曜日休演)
座席料金：SS席 11,000円、S席 8,500円、A席 5,500円、B席 3,500円(税込)

劇場案内

東京都千代田区有楽町1-1-3 東京宝塚ビル内 TEL：03-5251-2001
JR有楽町駅、地下鉄日比谷駅(日比谷線/千代田線)



赤十字国際委員会 駐日事務所

〒105-0021
東京都港区東新橋2-9-3 ラ・ピアッツォーラ6階
TEL：03-6459-0750/FAX：03-6459-0751
日本語ウェブサイト：<http://www.icrc.org/jp/intro>

